

泉州観光の現状と課題

中尾 清

1 はじめに——研究の背景と目的

泉州地域（以下、「泉州」という。）とは、大阪府の南部に位置し、堺市以南9市4町を指す（図1）。合計面積は、約570平方km、人口を合計すると、堺市の約80万人を含めて約170万人になる。大阪湾の対岸の良く似た風光の神戸市1市と比べると、面積では、神戸市が約550平方km、人口では、約150万人で、泉州とほぼ同じである（表1）。

泉州は、東に、金剛・葛城・紀泉の山地、西と北は大阪湾に面し、青い海・市街地・田園地帯・山脈が連なっている。気候温暖、風光明媚で、農林水産業も盛んである。近年までは、紡績業などの第二次産業も盛んであった。また、大阪市や堺市など、すぐ近くに雇用の場があり、経済的なものも含めて、恵まれたところに立地している。その分ややもすると観光や郷土の歴史・文化に対する住民や行政、企業の意識や取り組みは、希薄な地域であった、と言えよう。

近年わが国経済は、長引く“平成不況”により依然先行きが不透明である。それを打開するために、国も観光立国を全面に出して、2003年度より、ビジットジャパンキャンペーンを展開している。地方自治体でも政策として“観光振興”を重視してきている。この泉州でも例外でなく、各自治体を中心に観光振興が重点施策として掲げられてきているのが現状である。

何故、観光振興が期待されているのか。

一つには、この“平成不況”下、地域経済の活性化の手段として観光への期待が大きいことにある。

二つ目には、“人生90年時代”を迎えて、人々のふるさと意識が深まり、生きがいを“観光”に求めていることにある。

三つ目には、貴重な自然、歴史的な資源、快適な住環

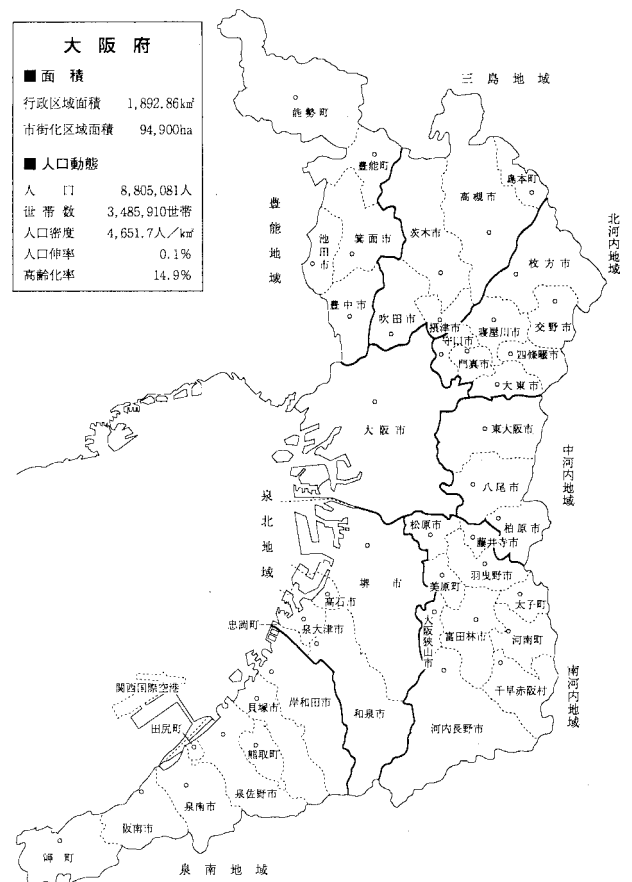


図1 大阪府内市町村図
出所：『大阪府市町村ハンドブック』（大阪府総務部編、2001年）より

境等、地域のよさの持続的な利用を進めることに多くの賛同、共感を得ようになってきたこと、にある。

ある意味で、従来の観光振興策は、業界と行政が主体で「如何に集客するか」という観光業者のためのものであったが、現在では、市民・業界・行政の協働により、市民にとっては、「いつまでも住みつづけたくなるような」まちづくり、観光者にとって「何度でも訪れたくな

表1 泉州地域の人口と面積
(単位：人、世帯、km²)

地域	自治体	人口		行政区域面積 H12.10.1現在
		H13.9.1推計	H13.9.1推計	
泉北 地域	堺市	793,139	301,249	136.79
	泉大津市	75,600	27,611	12.27
	和泉市	173,703	58,519	84.99
	高石市	62,254	22,780	11.35
	忠岡町	17,442	6,029	4.03
泉南 地域	岸和田市	201,151	69,883	71.89
	貝塚市	88,676	30,140	43.96
	泉佐野市	97,063	34,575	54.38
	泉南市	64,351	20,931	47.34
	阪南市	58,498	19,238	36.10
	熊取町	43,349	13,976	17.19
	田尻町	6,785	2,503	3.86
	岬町	19,553	6,899	49.03
合計	1,701,564	614,332	573.18	

資料：大阪府行政資料を参考にして作成した。

るような」まちづくりを目標にした観光振興策に変化してきている、と言えよう。

本稿の目的は、それらの状況を踏まえて、観光振興について泉州では、どのような取り組みが成されてきたのか、また、されているのか。泉州における住民・事業者・行政の協働による観光振興の政策の現状と課題、今後のあり方を探ることである。

なお、本稿では、大阪府全域を「大阪」と表記し、大阪市と区別している。

2 大阪府の観光動向

(1) 大阪府の観光動向

泉州観光を論ずる前に、大阪府内の観光動向について述べることにしよう。

大阪府内の観光の牽引車である大阪市では、関西国際空港・開港前の1993(平成5)年度に、初めて本格的な「大阪市の観光動向調査」を行っている。大阪市内では、その結果等を踏まえ、「都市型観光」・「ビジター」に着目した「大阪市観光基本施策」を策定し、その後、関西国際空港の開港(1994年)、民間活力による都市型観光施設やユニバーサル・スタジオ・ジャパンの開業などの観光開発を背景として、「国際集客都市づくり」に力を入れてきた。

江戸期の大坂(大阪)は、「天下の台所」で、「武士があまりいない町人のまち」「井原西鶴や近松門左衛門、与謝蕪村などが活躍した文学のまち」「懷徳堂、適塾などがある学問のまち」であった。その大阪は、明治期

以降、「殖産興業」の国策にのっとり、貿易・紡績業・重厚長大産業・家電・金融・商社が中心の産業都市となり、「煙もくもく東洋のマンチェスター」「もうかりまっかのまち」が代名詞となった。

その大阪市は、第二次世界大戦で壊滅的な打撃を被っている。

すなわち、

「昭和20年本市は1月3日から8月14日までの230日の間に28回の空襲を受け、市内は一望焼け野原となった。本市の被害は、焼失倒壊戸数31万955戸、死者1万388人、負傷者3万5543人であった¹⁾」。しかし、戦後は、わが国の高度経済成長の波に乗って、大阪のまちも発展したが、経済の中樞が徐々に東京へ一極集中し、その影響を受け、大阪市は、支店経済の色を濃くしてきた。「バブル経済」の破綻から始まった「平成不況」は、さらに追い打ちをかけ、近年の大阪経済は行き詰まりの様相を見せている。

また、関西における「ヒト・モノの交流」の増大の期待を担っている関西国際空港は、特に重要な役割を果たしているが、近年の「平成不況」、それに追い打ちをかけように、2003年春、東アジアで蔓延した新型肺炎(SARS)、イラク戦争などによって、航空機の乗降客数が減少している。また、国内線の伊丹空港への移転による便数の減少などにより、大きな影響を受けている。このような状況で、関西圏・大阪・大阪市における観光客の動向にも厳しい状況が出てきているのが現状である。

(2) 「観光立都・大阪」を目指して

その打開策として、大阪は、観光立都を目指している。関西圏では大阪市は、経済力で優位に立っているが、京都市・神戸市に比べると後発の観光都市であるといえる。しかし、近年の動向を見ると、いよいよ「眠れる獅子が動きだした」という感がしてきている。

ところが、大阪市は、戦災にあっているため、神戸市と同様、観光開発をしないと、京都市・奈良市には太刀打ちできない。しかも、その観光開発も神戸市の後追いの傾向がある。例えば、神戸まつりのパレードや須磨海浜水族園が先に開催・開園しており、その後に御堂筋パレードや海遊館を後追いで開催・開園していることなどをあげることができる。

2001年3月31日、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開業した。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンは、「ハリウッド映画をベースとしたライド、ライブ・ステージ・ショー、実際のテレビ番組制作スタジオと、

エンターテインメント、レストラン、ショッピングを国際的なロケーションに統合化した一年を通して楽しめる「ハリウッド映画テーマパーク」である。だが、一方、万博公園、枚方パーク、みさき公園、狭山遊園、服部緑地などへの影響も大きく、昨(2003)年3月末で閉園した宝塚ファミリーランド、神戸ポートピアランド(経営主体を変えて存続)のことを考えると複雑ではあるが…。

(3) 「観光立都・大阪」宣言

「観光立都・大阪」宣言の背景として、観光都市としての大阪が持つ潜在力を次のように指摘している。

「大阪は多くの人々がビジネス、コンベンション、ショッピング、飲食、観劇、コンサート、スポーツ観戦、学習といった様々な目的で訪れるにぎやかで活気に満ちた大都市である。近年ではユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)や大阪国際会議場等、国際的に人を引きつける施設が相次いでオープンし、2007年には関西国際空港の平行滑走路の供用も見込まれ、『国際集客都市』としての基盤や滞在型観光を呼び込む魅力も整いつつある。

元来、大阪は古代古墳群や難波宮跡、大阪城、文楽や上方歌舞伎など歴史文化資源を豊富に有する都市であり、天神祭、だんじり祭、御堂筋パレード等の新旧のまつりも数多い。また、大都市でありながら山や海にも近く都市部に大小の川がはりめぐらされた『水の都』でもある。さらに、ユーモアに溢れた朗らかなホスピタリティとてなしの精神を持つ『大阪人』こそ、大阪の最大の魅力である。しかしながら、これまでのところ、その魅力がポテンシャルにとどまっている側面がある。」

3 泉州観光の現状と課題

(1) 泉州の観光資源と活用状況

泉州の観光資源は、大阪市に比べると「質・量」ともに低いと言わざるを得ない。そこで、代表的な泉州の観光資源をとり上げアトラダムに問題点等を指摘すると、次のとおりである。

- ① 関西国際空港(→近年の不況によって、航空機の乗降客数や関西圏・大阪・大阪市における観光客動向にも厳しい状況が出てきている。)
- ② 「大山古墳(仁徳陵)」などの百舌鳥古墳群(→世界的遺産である。活用できていない。)
- ③ 岸和田のだんじり(→マスコミを通して全国的に有名になっている。近年とみに活発になってきている。)

表2 大阪府・観光客数の推計 (万人)

年度	合計 (100%)	大阪市 (%)	北大阪 (%)	東部大阪 (%)	南河内 (%)	泉州 (%)
1998 (平成10)	12,794	9,588(75)	1,203(9)	653(5)	283(2)	1,067(8)
1999 (平成11)	13,331	9,698(73)	1,313(10)	790(6)	398(3)	1,132(8)
2000 (平成12)	13,423	9,783(73)	1,374(10)	752(6)	338(3)	1,176(9)
2001 (平成13)	13,982	10,118(72)	1,447(10)	758(5)	380(3)	1,279(9)
2002 (平成14)	13,752	9,740(71)	1,479(11)	753(5)	365(3)	1,415(10)

資料：大阪府商工労働部観光交流課『大阪府観光統計調査成果報告書』(各年度版)より作成。

(注) 北大阪とは、吹田市・高槻市・茨木市・摂津市・島本町・豊中市・池田市・箕面市・豊能町・能勢町の地域をさす。東部大阪とは、守口市・枚方市・寝屋川市・大東市・門真市・四条畷市・交野市・八尾市・柏原市・東大阪市の地域をさす。南河内とは、富田林市・河内長野市・松原市・羽曳野市・藤井寺市・大阪狭山市・太子町・河南町・千早赤阪村・美原町の地域をさす。泉州とは、堺市・泉大津市・和泉市・高石市・忠岡町・岸和田市・貝塚市・泉佐野市・泉南市・阪南市・熊取町・田尻町・岬町の地域をさす。

- ④ 犬鳴山(修験道)(→女人禁制でない修験道の道場で全国的に有名である。「心」の時代なのに観光に活かされていない。)
- ⑤ 犬鳴山温泉(→大阪で唯一の温泉郷である。温泉郷としては、規模が小さい。競争があまりない。)
- ⑥ 牛滝温泉・森(いよやか)の郷(→競争があまりない。)
- ⑦ ほの字の里、奥水間温泉(→競争があまりない。)
- ⑧ 葛城山のブナ林(→展望が良い。)
- ⑨ 岸和田城(→再建から約半世紀で街並みに存在感が出てきた。)
- ⑩ 堺市北旅籠町付近(鉄砲鍛冶屋敷など)、岸和田本町、貝塚・寺内町(願泉寺)、紀州街道・熊野古道沿い(→町並み保存。現在では、消滅寸前で、“崖っ縁”に立っている状態である。)
- ⑪ 貝塚・太鼓台(感田神社)、泉南・地車(やぐら)、泉州地区のだんじり、えべっさん(→魅力的だが、知名度が低い。)
- ⑫ 堺市ハーベストの丘、貝塚市農業庭園(整備中)、泉南市農業公園(整備中)(→整備中のものは、類似のものにならないように要注意である。)
- ⑬ 特産品「泉州ブランド」(→全国的に有名になってきている。泉州玉葱、水なす、和泉ぐし、堺の刃物、泉州の地酒については、的確なマーケティングが必要である。)

(2) 泉州観光の課題

表2を見ると、大阪市の観光客数からみて、「泉州の観光客数が決して多い」とは言い難い。なぜ少ないのか。それでは、どこに課題があるのか。泉州観光のウォッチャーとして、観光行政に力を入れている神戸市と対比して検討してみると、次のような課題が浮かび上がってくる。

本稿では、神戸と泉州の人口、面積、風光は、ほぼ似ているが、神戸の「1市」に対して泉州は「9市4町」であることを冒頭で示した。泉州にこのような多くの地方公共団体が存在するという現実には、当然、各々の行政の取り組みに大きな差が出てくるのは明白である。特に観光行政に限って指摘すると、次のとおりである。

神戸市は、1市であるので、観光行政に「メリハリ」がある。しかも、集中的に人材を配置し、観光開発、観光宣伝等に力を集中させることができる。その結果、「観光都市神戸」として一般に認識されている。

ところが、泉州では、各市町で独自の観光行政を展開しているため、「観光地」はあるものの「観光都市」としては、一般に認識されているとは言い難い。すなわち、「ヒト・モノ・カネ・情報」などの質・量ともに少なく、神戸市に比べ不利は免れない。

1) 観光を支える人材と観光行政ノウハウ

- ① 人材が少ないので、観光行政に職員を配置しにくい。
- ② 人材・組織が分散化している。
- ③ 人事異動で職員がすぐ代わる。(観光専門家が育ちにくい。)
- ④ 観光協会の事務局を行政が兼務している。
- ⑤ 公立の観光施設は、経営感覚が乏しい。
- ⑥ 観光予算・財源が乏しい。
- ⑦ 観光客のニーズがつかめていない。(観光マーケティングができていない。)
- ⑧ 観光宣伝が足りない。

2) 観光資源

- ① 観光資源が少ない(ない)。
- ② 観光資源の規模が小さい。
- ③ 観光資源が点在している。
- ④ 観光開発が分散化している。
- ⑤ 文化施設が競合している。(同じような“ハコモノ”が多い。)
- ⑥ 交通が不便である。
- ⑦ 宿泊施設が少ない(ない)。

- ⑧ 土産物・名産品が少ない(ない)。

3) 観光産業

- ① 観光産業は、零細・中小企業が圧倒的である。
- ② 観光産業は、観光商品の薄利多売を旨とするが、不況のため売れない。
- ③ 観光産業の魅力が感じられないので、新規参入が見られない。

4) 関西国際空港

大阪観光の“エース”として期待され、重要な役割を果たしてきている関西国際空港が、近年の“平成不況”の影響などによって、航空機の便数・乗降客数も減少気味である。

5) 住民の意識

泉州は、気候温暖、風光明媚な土地柄である。住民は、大都市である大阪市、堺市に近接していて、雇用には困らなかった。かつては、地場の産業としての紡績業の隆盛したこと、そして、“ガチャマン”という言葉を生んだ。また、泉州“タマネギ”に代表されたように豊かな農業地帯であった。“茅渚の海”の豊かな水産資源があった。等々。このような理由で、地域経済は、泉州の域内で完結し、生活にあまり困らず、現金収入は近接する大都市から得ることが出来た、という構図から、観光収入を得ようということなどは、あまり考えたこともなかったのではないかと推察される。

4 広域連携のすすめ

(1) 泉州観光の展望

このような課題を持ちながらも、泉州には、観光の潜在力があり、その展望には明るいものがある。近年、地域も行政も「金は天下のまわりもの」。「人が動かなければ、お金は回らない」ということに気がついてきたように思われる。それならば、「国の光」を磨き、住みよいまちに、観光客にも来てもらおう、そして、住民の“いきがづくり”にもしていこう、という機運が高まっている。その機運を概観してみよう。

1) 「観光立都・大阪」宣言・アクションプログラムと泉州観光の振興

「観光立都・大阪」宣言によって提言された、大阪府内の大阪府観光連盟、大阪観光協会、大阪コンベンションビューロー3団体は、2003年春、統合され一つの団体(大阪観光コンベンション協会)になった。

これまで各団体は、バラバラに活動していたが、大阪観光コンベンション協会として、三つの力を一つに結集

し、観光客およびコンベンションの誘致・宣伝活動を効果的に進めることになった。まさに「1本の矢は簡単に折ることができるが、3本の矢を束ねれば折ることはできない」という故事の如く、その力を発揮することであろう。

また、「観光立都・大阪」宣言・アクションプログラムには、泉州観光振興の重点プログラムの例として、

- ① 関空発トランジットツアー
 - ② 紀泉ふれあい自然塾(紀泉わいわい村)整備事業
 - ③ 岸和田市里山保全整備事業
 - ④ 泉南市農業公園整備事業(仮称)
 - ⑤ 南海・阪神なぎさ海道ウォーク
 - ⑥ 貝塚市観光地連携促進事業
 - ⑦ 貝塚市観光ボランティア養成講座の開催
 - ⑧ 和泉市ふるさと観光推進事業
 - ⑨ 和泉市観光レンタサイクル事業
 - ⑩ 和泉市観光インストラクター等活用事業
- などが掲げられている。

2) 「紀泉わいわい村」とグリーンツーリズムの可能性

金剛生駒紀泉国定公園の山の中(泉南市)に、大阪府が「紀泉わいわい村」を、総事業費18億2300万円で建設し、2003年4月オープンした。山と森林に囲まれ、集落の中を川が流れ、何か“一昔前の日本の田舎の佇まい”を彷彿とさせる。「紀泉わいわい村」は、山間の約4haの敷地に、生活体験施設(農家)6棟、管理・研修棟、キャンプ場、田んぼや畑(生産体験施設)、自然観察コースなどが整備されている。宿泊ができる生活体験施設などは、昭和20年代の泉南の農家が忠実に再現されている。土間や板の間、囲炉裏、かまど、五衛門風呂もある。

近年グリーンツーリズムが注目されている。グリーンツーリズムは、「都市の住民が自然や景観を求めて農山村や漁村へ出かけ、今までの“見る観光”から一步踏み込んだ、“する観光”を展開している。すなわち、そこでの生活体験や地域住民との交流を通じて、観光欲求(“楽しみ”や“喜び”、“やすらぎと感動”)を満たす観光行動」である、と言える。

まずは、都市住民が「紀泉わいわい村」で“里山体験”に挑戦し、来るべき農山村での生活体験や地域住民との交流に備えて、予行演習をすることができる。まさに、“グリーンツーリズム入門塾”となるであろう。

(2) 広域連携の展開

泉州の観光魅力を高めるためには、泉州地域が協力し

て、神戸市1市に匹敵する力を発揮することが必要であろう。現実には、各市町村の住民の意識や財政力、歴史・文化の違いなど、合併の必要性は叫ばれるが、なかなか難しい。しかし、観光振興については、お互いに連携をとることに大きな障害はないと思われる。広域連携して観光振興をするということは、「三本の矢」にも相通じるもので、観光資源の魅力を高めるためには、「点と点」を結んで「線」にする。「線と線」をつないで「面」にする。このように「面的な展開をしないと観光都市間競争には勝てない、という考え方が必要である。

そこで、泉州で取り組まれている広域観光連携の現状を概観してみよう。

1) 「華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会」の活動

大阪府内の広域観光振興団体としては、「華やいで大阪・南河内観光キャンペーン協議会」(河内長野市などで構成)、「豊能地区広域観光推進協議会」(池田市などで構成)などが活動しており、泉州では、「華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会」(泉南市などで構成。以下、「南泉州推進協」という。)が活動している。

南泉州推進協は、1991年に結成され、構成団体は、岸和田市、貝塚市、泉佐野市、泉南市、阪南市、熊取町、田尻町、岬町などである。

2001年度の事業内容は、観光ガイドブックの作成、ツアーエキスポ2001への出展、第9回地域伝統芸能全国フェスティバルへの出展等の活動である。

2) 「根来街道グリーンツーリズム推進連絡会」の活動

2002年に「根来街道グリーンツーリズム推進連絡会」が結成された。構成団体は、大阪府・泉南市・和歌山県・岩出町・根来寺・南海電鉄である。泉南市と岩出町と結ぶ根来街道の沿線には、泉南市農業公園(整備中)、金熊寺(梅の名所)、紀泉ふれあい自然塾、根来寺、根来げんきの森、和歌山県植物公園緑化センターなどが点在している。また、2003年4月には、この街道沿いに「道の駅」が整備され、オープンされたので、これらを活用して、府県を越えて広域で連携して、グリーンツーリズムを振興しようとするものである。

2003年7月、「根来街道グリーンツーリズム推進連絡会」は「協議会」に組織替えされ、その組織を強化しようとしている。そして、共同宣伝、共同イベント(例えば、紀泉山脈横断ハイキング大会など)を開催して、根来街道の沿線の観光資源の宣伝や開発促進を図っている。

3) 泉南市と和歌山県龍神村との交流・連携

2000年7月、大阪府泉南市と和歌山県龍神村は、姉妹提携を結び、都市と山村との交流が始まった。泉南市は、人口約6万5千人で、大都市とはいえないが、和歌山県側から見れば、泉州、大阪への入口に位置している。

また、龍神村は、人口約千人で龍神温泉に代表されるように知名度の高い温泉観光地である。この両者は、お互いの持っているものを提供し合うことにより、例えば、泉南市は、泉州の特産（水なす、魚介類など）を龍神村へ持ち込み、龍神温泉の宿泊客を通して、泉南市の情報を全国へ発信することができる。一方龍神村は、温泉の湯をタンクローリーで運び、泉南市に居ながら龍神温泉を楽しんでもらうというイベントなどを通して、龍神村の情報を泉州、大阪へ、そして、全国へ発信することができる、という相互メリットが見込まれる。

このような地道な交流が継続されるならば、住民同士の相互訪問も増加し、徐々に輪が広がっていき、ひいては泉南市と龍神村の知名度とイメージアップにつながっていくものとなる。

4) 泉南ルネッサンスカレッジ

泉南市では、文部科学省の委託事業として2003年度において「生涯学習まちづくりモデル支援事業」を、行政・市民・大学の三者が協働して実施している。テーマは「世界に拓く自然と歴史街道のまち泉南の創造」とし、「文化・歴史」「国内外交流」「自然」の3学科からなる「泉南ルネッサンスカレッジ」を創設し、泉南“楽”会、各種講座、イベントなどの展開により、泉南市の地域が有する資源（人、もの、自然、歴史、文化、情報など）を改めて学習するとともに、ホスピタリティあふれる生涯学習（＝観光）まちづくりを展開している。

5 これからの泉州地域観光行政のあり方

(1) 大阪や泉州地域の「個性＝独自性」の発揮

大阪では、「観光立都・大阪」を宣言し、2003年4月から、本格的にアクションプログラムを実施に移し、大阪を挙げて、観光振興に取り組んでいこうとしている。

泉州地域も堺市・岸和田市を始め各市町で観光振興を市町政の重要な柱の一つとして掲げて推進している。しかし、「ヒト・モノ・カネ・情報・観光資源」の面では、大阪市、京都市、神戸市などには遙に及ばない。したがって、泉州地域にとっては、さらなる知恵を出し、

その地域の「個性＝独自性」を確立し、次のような観光振興に取り組む必要がある。

1) 「大山古墳（仁徳陵）」などの百舌鳥古墳群の活用

世界的遺産である「大山古墳（仁徳陵）」などの百舌鳥古墳群の活用である。2002年11月、「宮内庁書陵部は14日、大阪府太子町にある聖徳太子の墓とされる叡福寺北古墳の発掘調査現場を初めて考古学研究者に公開」（神戸新聞、2002年11月15日付け）という報道があった。宮内庁が管理している百舌鳥古墳群の多くは、「天皇陵」ということで、公開は非常に困難であるが、「陵墓」は、正に日本の「国の光」である。できれば科学的な調査をして、神戸市の「五色塚古墳」のように復元し、エジプトのピラミットのように、国の内外に「観（示）す」ことができないものか。せめて、近くにある「いたすけ」古墳の復元が望まれる。

2) 犬鳴山（修験道）の活用

全身を滝水に打たれ、ひたすら念仏を唱えている姿は、感動的でもある。犬鳴山は、大峰山と異なり女性も受け入れてくれる修験道の道場である。今は「心」の時代である。「癒し」の場として、犬鳴山（修験道）の活用は有効であろう。もとより信教は自由であるが…。

3) 温泉の活用

泉州には、犬鳴山温泉郷、牛滝温泉・森（いよやか）の郷、ほの字の里、奥水間温泉などがあるが、規模が小さい。温泉は心身ともにリラックスさせてくれ、健康保持のためにも必要不可欠である。さらに、新たな温泉地の開発を進め、既存温泉の魅力度を高めていく必要がある。特に、阪南市の山中溪の温泉旅館の復活が望まれる。

4) 里山の保全活用

金剛・葛城・紀泉山系は、国定公園に指定されている。なかでも葛城山のブナ林は、貴重な存在である。至る所に自然が残り、展望も非常に良い所も多い。また、葛城山頂に向けて、大阪府、和歌山県の両方からアプローチできる林道が整備されており、府民・観光者にとって憩いの場となっている。ただ、林業の衰退に伴って、広大な山林を管理することが非常に困難な状況になってきている。行政・所有者による管理には、限界があり、府民・観光者は、山に入るときのルールとマナーを守り、ボランティア団体（例えば、ブナ愛樹クラブ、泉南市里山を大切に作る会など）の協力により、積極的に保全活用することが望まれる。

5) 歴史的景観の保全活用

岸和田城（再建）、岸和田市本町、堺市北旅籠町付近

(鉄砲鍛冶屋敷など)、貝塚市寺内町(願泉寺)、その他市町の紀州街道・熊野古道沿いに残っている古い町並みなどは、泉州の貴重な、かけがえのない財産である。ぜひ、所有者の理解の下、できれば、伝統的建造物群保存地区指定、文化財指定など行政の支援を得て、地区ぐるみで保存してもらいたい。紀州街道沿いの岸和田市本町では、地域の皆さんが自主的に古い町並みを保存・公開し、ボランティアで、町並みの案内や建造物の説明をしている。また、2002~3年にかけて、貝塚市(寺内町:並河家住宅など10ヶ所)、泉南市(新家:山田家住宅)が国登録有形文化財になった。この輪を泉州地域一帯にもっと広げてもらいたい。

(2) 歴史や文化に根ざしたイベントの展開

「カネ」で買えないものの一つに、その地の歴史や文化がある。真似はできるが、本物になるには、「ヒト・モノ・カネ・情報」と長い「時間」がかかる。

泉州地域には、歴史や文化に根ざしたイベントが存在している。すなわち、岸和田市・貝塚市・泉佐野市・熊取町のだんじり、泉南市・阪南市の地車(やぐら)、貝塚市の太鼓台(感田神社)など、近年とみに活発になってきているが、岸和田のだんじりのように、観光をもっと意識して、全国に発信していても良いのではないか。

(3) 観光資源の開発・維持管理・リニューアル・再生・活用

泉州地域における観光資源の開発は、まだ、途上にある。貝塚農業庭園、泉南市農業公園は、現在、整備中で、完成までには、まだ時間がかかる。熊取町の「旧中林綿布工場保存活用」は、魅力的な計画である。りんくうタウンには、構造改革特区として、何か観光施設(カジノ?)などが計画される場所であるが、まだ、見えてこない。

また、イベントとしては、大阪JCが“夢サーキット”をりんくうタウンの公道上で実施しようと運動をしているが、実現できれば、モナコのような国際グランプリに発展する可能性を持っている。

泉州地域にある観光資源については、大切に維持管理・リニューアル・再生し、活用していくことが肝要である。また、玉葱、水なす、和泉ぐし、堺の刃物、地酒など、泉州の特産品は、「泉州ブランド」として、的確なマーケティングの下に全国へ売り込んでいく必要がある。田尻漁港の日曜「朝市」など漁港や水産資源の活用

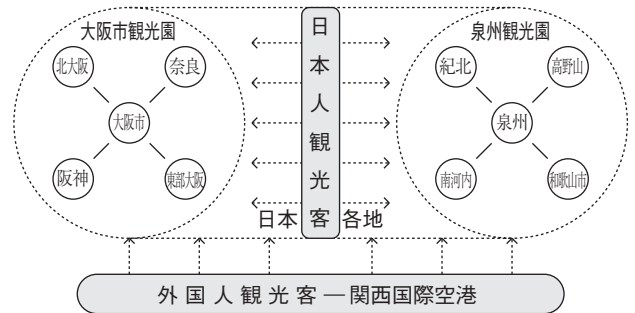


図2 大阪市と泉州を中心とした広域観光連携圏

も有効である。

(4) 広域連携・観光の展開——「大阪市と泉州を中心とした広域観光圏」の構築——

21世紀には、押し寄せる訪日外国人観光客や“いきがい”づくりや自己実現を求めて国内旅行する観光客に対して、大阪の“観光魅力”だけでは、対応できない。このためには近隣でお互いの持てる“観光魅力”と「個性=独自性」を發揮するために「大阪市と泉州を中心とした広域観光圏」を構築するべきである。大阪市に比べて泉州の力不足は否めないが、泉州は、関西国際空港のお膝元であり、和歌山県と連携すれば、“観光魅力”を發揮することができると思う。(図2)。

また、外国との連携を考えても、2時間もすれば、関西国際空港からソウルや台北に到着できる。大阪でコンベンションに参加し、アフターコンベンションの観光は、ソウルや台北ということも十分可能である。

(5) 「集客・観光・交流」型の観光行政の展開

近年、国民の価値観は、時代を反映して、“物”から“心”へと変化してきており、その“心”のありようは、“楽しみ”から“喜び”へ、“喜び”から“感動”や“やすらぎ”を求めて変化しつつあり、観光にも“歴史・文化観光”を中心に、「集客・観光」から「観光・交流」への新しい潮流が認められる。

観光の特色は、人々に“楽しみ”をもたらすところにある。“楽しみ”は“喜び”につながり、“喜び”は“感動”と“やすらぎ”を生み出す。“感動”と“やすらぎ”は、新たな“発見”につながり、新たな“発見”は生きる“喜び”となり、新たな“感動”と“やすらぎ”へと、さらにつながっていく。この循環作用が“いきがい”づくりにつながっており、その原動力が観光にある、と言えよう。

このような背景のもとに、行政に対して、市民や観光

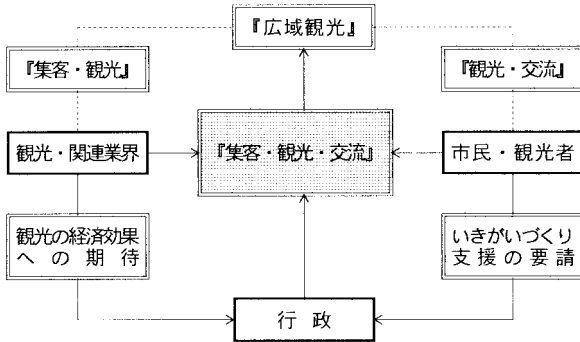


図3 『集客・観光・交流』型の観光行政

者の生涯学習の観点から、“いきがい”づくりへの支援、仲間づくりの場の提供への要望が高まってきている。このことは、「観光・交流」を通して、一人ひとりが自己実現できるように、すなわち、行政に対して、個人の生涯学習への支援を要請してきている、といっても過言ではない。

従来の観光行政は、どちらかといえば、経済効果を求めた「集客」を目的とし、観光業者への対応が中心であったが、近年は、これに、日常生活圏外との「交流」の視点を加えた、しかも、“いきがい”づくりの一環も担った、新しい「集客・観光・交流」型の観光行政の展開が要請されてきている。(図3)。

観光は、市民や観光者にとって「21世紀の基幹産業になる」ことも地域経済の活性化に必要であるが、ひとりの人間としての“いきがい”や自己実現も大切である。観光行政のさらなる支援が求められている。

6 おわりに

——観光行政組織の充実と人材の育成——

(1) 観光行政組織の充実

表3・4は、「大阪府内観光行政主管課の状況」と「大阪府内観光連盟・協会の状況」である。この表を参照して、「観光立都・大阪」を推進するには、いささか心もとない。ぜひ、観光主管課も設置していない市町村には、「観光課」を、それが無理な場合は、「観光係」を設置してもらいたい。また、全市町村には、「観光協会」を設置してもらいたい。

泉州などは、指定都市を目指す堺市などの泉北地域を除いて、まとまりのある南泉州の「5市3町」で、協議会ではなく、観光行政を担当する一部事務組合「南泉州観光局」を設立し、一体となって観光振興を図っていかどうか。現況は、あまりにも観光行政の力が分散さ

表3 大阪府内観光行政主管課の状況

主幹課	合計	大阪府	大阪市	市町村
観光交流課	1	1	—	—
集客観光課	1	—	1	—
観光振興課	1	—	—	1
交流観光課	1	—	—	1
商工観光課	6	—	—	6
商工労働観光課	1	—	—	1
商工・地域振興課等	34	—	—	34
合計	45	1	1	43

資料：大阪府行政資料を参考にして作成した。

表4 大阪府内観光連盟・協会の状況

観光協会	合計	大阪府	大阪市	市町村
社団法人	4	1	1	2
財団法人	1	—	—	1
NPO法人	1	—	—	1
任意団体(市町村)	12	—	—	12
任意団体(地域)	1	—	—	1
合計	19	1	1	17

資料：大阪府行政資料を参考にして作成した。

れている。また、それに対応して各市町の観光協会の連絡調整をする「南泉州観光連絡協議会」を設けてはどうか。

そして、「南泉州観光局」は、“広義の観光行政”を展開するため、政策立案を中心に活動し、観光施設の管理や観光宣伝などは、「南泉州観光連絡協議会」と各市町の観光協会の担当とし、役割分担をすることが肝要である。

(2) 人材の育成

「職員が3年ぐらいで変わってしまって困る」と、市民からいわれることがある。事実そのとおりであろう。ところで、“狭義の観光行政”は、観光案内から観光宣伝、観光計画、観光統計、観光施設の管理・運営、庁内・民間企業・民間非営利団体などとの連絡調整などまで、多岐にわたっている。3年ぐらいでは、観光を熟知し、観光政策を立案するノウハウを蓄積して、「さあ、今から」というときに異動することになってしまうので、観光のエキスパートは育たない。泉州は、関西国際空港のお膝元で、「観光立都・大阪」の実現をめざす“リードオフマン”の役割を担っている。その観光行政の最前線の職員として、どうしても観光のエキスパートの力が必要である。そのためには、観光に適材の職員を見だし、キャリア・パスの一環として、観光主管課に

「出たり入ったりさせて」幅広い行政経験を積ませることが肝要である。

池田市の観光振興課長のように、民間から公募で登用するなど思い切った人事を行うことも必要である。また、泉南市の「SENNAN まちづくり市民会議」のように、積極的に市民が、「生涯学習」や「観光」まちづくりを推進しているが、このような“地域”の力が21世紀は「観光の世紀」と言われているなかで、今後、大きな力を発揮していくものとする。 “地域”と“行政”の二人三脚が重要になってくる。

(3) 観光行政担当者の役割

とりわけ、観光行政担当者は、“地域”と“行政”の二人三脚をするにあたって、市民とのパートナーシップを重視し、さらに、観光事業主体と協力することが肝要

である。そして、オーガナイザーとコーディネーターとしての役割を果たし、三者が一体となって英知を絞ることが必要である。

このように、観光行政担当者は、絶えず時代の潮流にアンテナを張って、“PLAN→DO→SEE”を繰り返し、「最小の経費で最大の効果」をあげることが、最大の役割であり、観光行政の“プロ”としての責務である。

注

- 1) 『大阪市政九十年の歩み』大阪市総務局(1979)、19・20頁

参考文献

- 大阪市経済局(1994)『「大阪市の観光動向調査」報告書』